

は喜劇やエピグラムなどの諸ジャンルと諷刺とはジャンルのレベル的に大きな隔たりがあった)。このように、18世紀の諷刺に対する彼らの理解の中には、根強い偏見があるが、彼ら諷刺研究者達に課せられた今後の課題は、各時代（とりわけ18世紀）の作家や詩人達の諷刺観を明示し、諷刺の流れを的確に掴むことである。

以上のことを考慮に入れながら、報告者はロシア最初の諷刺家カンテミールに焦点を合わせ、18世紀の諷刺の特質を検討することにより、そもそも18世紀の諷刺、つまりロシア本来の諷刺とはいかなるものであったか、その本質に迫った。またその際、カンテミールの諷刺がロシアに現われた理由も簡単に触れておいた。

「ロシアの夜」と「罪と罰」

糸 川 紘 一

1974年のナジーロフの論文「ウラジーミル・オドエフスキーとドストエフスキー」はこの二人の作家の関係論の研究史上における画期的論文となった。ナジーロフはそこでドストエフスキーの「貧しき人々」、「ネートチカ・ネズワノーワ」、「罪と罰」がそれぞれオドエフスキーの「生ける死者」、「公爵令嬢ジジ」、「ロシアの夜」と深い繋がりを持つことを論じた。このうち第一組の繋がりにはシクロフスキー、ヒン等により、また第二組の繋がりにはグROSSマン、ゴゼンブード等により1950年代から各々の作家の作品論、解題、注釈などの場で僅かながら言及されてきた。だがナジーロフ論文の中心部をなす第三組の繋がりへの指摘は二人の作家の代表作の繋がりへの指摘であり、いずれの作家の側から見るにせよ見逃せない画期的発言である。この見解の重要性と妥当性はその後の数年間に現われた両方の作家の研究文献中の反響（マイミーン、1975年；フリドレーンデル、1980年）が物語るところである。

報告は甚しい不首尾に終わったが、報告者の意図はナジーロフの創見である「ロシアの夜」と「罪と罰」の繋がりを出展的に継

承することにあつた。ナジーロフは「ロシアの夜」の第5夜「名の無い町」と「罪と罰」のエピローグにおけるラスコーリニコフの夢を比較考察して、形式・内容の両面から両者の繋がりを指摘した。その際、形式面で両者に共通の手法と見なされたのは「極限化の手法」である。即ち「名の無い町」は基本的命題を荒唐無稽に至らせてベントムの思想を完膚なきまでに批判したものとされ、その手法がまた「罪と罰」のものでもあるとされる。また内容面では、一方「名の無い町」では個人的利益と社会的利益を同一視するベントムの功利説の欺瞞性をテーマとすることが解説と引用で論述され、他方「罪と罰」のラスコーリニコフの夢の中ではオドエフスキーのこの「政治的・経済的」予言が比喩的・幻想的な形式で借用・反復されていると指摘される。次いでこのほかに借用とされるものには「旋毛虫」を除いた「軋轢、相互虐殺、職業の崩壊、農業の消滅、飢餓」が列挙される。最後に彼我の対照個所に現われた両作家の長短・異同が検討され、文学史上の意義が確認される。両者の長短・異同は本質的には継承関係・相補関係と把握されるべきで

あるが、対照された彼我の思想が発生的には親類関係にあることに注意が促され、ここでの結語となる。

オドエフスキーからドストエフスキーへの発展的継承を論じたナジーロフ論文は、今度はそれ自体が発展的に継承される胚種を豊かに宿している。報告者はここに言う第三組の周辺を伺う中で、「名の無い町」のその前夜である「ロシアの夜」第4夜中の一編「死者の嘲笑」と「罪と罰」第3編第6章のこれまたラスコーリニコフの夢との繋がりに着目した。「ロシアの夜」の第4夜、第5夜において際立つ、詩人がいなくて詩歌がない世界という主題は「死せる夜の調しらべとなり「死の国」の図となる。第4夜の全6編の構成は、次第に生の影が薄れて死の影が濃くなる、クレシェンドの展開を見せる。「死者の嘲笑」は全6話中の第4話という半ば過ぎの位置を占め、クレシェンドの最強部にあり、主題の展開は酣となる。詩人のいない世界の「死せる夜」は更け渡り、詩歌のない「死の国」の構図はほぼその輪郭を明らかにする。そこでは死が生に勝り、死が生を圧倒し、死者が生者を愚弄し、死者が生者を嘲笑する。夢か現か、生か死か。「死者の嘲笑」においては夢と現が分ち難く交錯し、生と死が緋い混ぜに結合する。はたまた結末に至り死者が

嘲笑し哄笑すれば、生者が驚愕し震憾する。いつどこでともなく現が夢に転じた作品世界は今ここで再び元の現の国に戻る。この結構は何に似、この仕組は何に類するであろうか。人はここにラスコーリニコフのあの夢、「罪と罰」第3編第6章の死せる老婆の哄笑の夢を想起しないであろうか。ここにして思えば、主人公たちの老若男女の違いこそあれ、人はラスコーリニコフの夢がまさしく「死者の嘲笑」の夢に通うことに想到しよう。

この二つの場面には主要な三つの共通点がある。第一は夢と現実の不二一如の繋がりであり、相互の絶妙な移ろいである。第二は片や物理的殺人、片や精神的殺人という相違こそあれ、その罪の罰となる法度が死であり、その法度を告げる裁判官が死者であり、その法度が告げられる裁判所が夢であるという思想である。第三は夢の後の他界談義にある。「死者の嘲笑」の夢の後にリーザを治療する医者の開陳する他界論ふうの言説は、「罪と罰」の夢の後にスヴィドリガイロフが披瀝する他界論を髣髴させる。

夢が通い、夢の前後がまた通う一対のエピソードに継承・影響関係を見ることは不自然でなかろう。

「母なる大地」の文化原理

——『戦争と平和』のナターシャの形象をめぐる——

石 川 達 夫

『戦争と平和』のナターシャは、ピエールとの結婚後に変貌するとされている。結婚前は非常に「詩的」な娘だったナターシャは、結婚後は母と妻の役割に没し切って

しまうとされている。しかしながら、実は、豊かな愛と地上的な豊饒性を本質とする点で、ナターシャは結婚前も後も一貫している。ナターシャの形象はしばしば大地や自